「赤心」継がん
Dream 五代塾 Sinbun（新聞）
GodaiJuku

第 15 号

発行：Dream 五代塾
吹田市千里山西 5-14-17
発行責任者：理事長　川口 建

明治十二年 前田正名の「直貿易七商社設立案」

Dream 五代塾顧問　曾野豪夫

江戸時代の貿易

江戸時代の貿易は、長崎会所で清国や阿蘭陀商人と長崎の商人の間で値決めする方式がとられていた（「入り貿易」）。しかし長年の鎖国令のため、日本人は外国での常識的な価格帯が分からず不利な貿易体制だった。そこで幕府も日本人が海外に出向いて商品取引きを行う「出貿易」を模索することになった。

イギリス資本主義の伝統たる自由貿易思想は、やがて十九世紀後半にかけて、新興欧米列強の海外進出により植民地膨張政策に凝縮されて行った。（奴隷貿易を含めて）

五代友厚は天保六年（一八三五）に生れた。五年後清国で阿片戦争が始まり、その二年後の一八四二年清国は英国に破れて香港を割譲した（その前後史は割愛）。そして欧露列強の日本への触手が押し寄せてくる国家存亡の風雲の時代が来る。安政四年（一八五七）、二十三歳になった友厚は藩命により長崎海軍伝習所に入所した。

友厚は五年後の文久二年（一八六二）一月、長崎駐在のままで御船奉行副役（そえやく）に任じられ、すぐにトーマス・グラバーとともに初めて上海に出張した。そして長さ四十五メートル、一五〇馬力の蒸気船を四万両の廉価で購入した（船名不詳）。この船は、日本人が初めて出（で）貿易で購入した超大型商品だった（と思う）。

同年四月、幕府はイギリスから購入した商船「アーミスティス」号（三本マスト、総トン数二五六噸又は三五八噸、三四、〇〇〇弗）を「千歳丸」（せんざい丸）と改名し、マストに「日の丸」を掲げた。そして幕府と長崎の役人や長崎商人のほか、幕府は各藩にも声をかけて会津、佐賀、尾張、浜松、阿波、大村各藩の人材も同船させた。長州の高杉晋作、薩摩の五代友厚が有名である。

	外国商館の取扱い比率	その頃
明治10年(1877)	97.40%	14年開拓使事件
20年(1887)	87.60%	18年五代逝去
25年(1892)	80.40%	27/28年日清戦争

慶応元年三月、薩摩藩が友厚の進言により英国に留学生十四名を派遣するに際して、友厚は引率団五名の副使の一人として訪欧し、翌二年二月に帰国した。その時前田正名という若者が留学の選に漏れた。三年末友厚は大坂に出張した。翌四年一月神戸事件、二月堺港事件と京都での英国パークス公使襲撃事件が起き、友厚は明治新政府の参与として堺事件の解決に尽力した。九月、明治と改元。そして友厚はそのまま大阪に居をかまえることとなった。明治三年、友厚は大和の儒学者扇鳳の娘萱野豊子と結婚した。

明治時代の貿易

幕末から明治維新にかけて日本は開港開市をなし、外国人居留地に外国商館が続々と進出してきた。日本の商人は裏口からしか入れず、しかも紅毛碧眼の商館主には会わせてもらえない。買弁と称する支配人格兼通訳である辮髪の清国人とネゴをする。買弁にコミッションを支払い、そこそこ大口商談がまとまる時にだけ異人の商館主に会わせて貰える…ことがある…これが明治時代の「商館貿易」だった。居留地制度の条約は明治三十二年（一八九九）に終了したが、習慣はそのまま長年続いた。（筆者の父はこの年に京都に生まれた。）

前田正名のフランス留学

前田は嘉永三年（一八五〇）薩摩藩漢方医の家に生まれた。友厚の十五歳下である。九歳の時から七年間漢学・洋学者の医家に住み込みで師事した。慶応元年、藩の英国留学生の選に前田は

前田正名
明治 15 年イタリアにて

漏れたが、藩費による長崎遊学を許され（十七歳）「語学塾」で英語を学び、また藩務に励んだ。翌二年友厚（三十二歳）が欧州から帰国して外国掛となって長崎に赴任した。前田は、友厚のもとで密使の一人として長州に赴いて交渉をしている。そして友厚の処世の態度、経済論に大きな感銘をうけ、後年『自叙伝』で述懐している。「五代は広く諸藩の周旋を為せしも、廉潔自ら持して、偏に国家に尽す心を以て事に処し、些かも商業的手段を試む事なかりき…」

モンブラン伯爵とモンブラン城。(wikipedia)
薩摩藩新納刑部、五代友厚らも宿泊した。

前田は慶応四年『和訳英辞書』（通称薩摩辞書）を出版のため、二回にわたって上海に出張した。明治二年、「大学校」（後の東京帝国大学）からフランス留学の指名をうけ、モンブラン伯爵が日本政府の代理公使兼総領事として帰仏するのに同行して暫く同館に勤務した。

留学中三～四年に普仏戦争が起こりフランス軍が敗退してナポレオン三世はプロシャの捕虜となり、数ヶ月間のパリ籠城を体験した。パリ・コンミューン（革命）の宣言とその抑圧などの混乱を体験して、前田は世界に「数種の文明がある」ことを悟り、やがては日本が欧州に追いつけると確信した。

前田正名の三大要綱

パリに七年間滞在、留学した前田は、十年に

帰国して内務省勧農局勤務となった。明治初期、日本の直接貿易を行っている会社（明治四～十五年設立）は十三社と言われていた。即ち七宝会社（七宝製品）、大倉組（製茶など）、起立工商会社（陶磁器類）、佐藤組（日本商会、製糸、雑貨）、三井物産（石炭、生糸、製茶）、廣業商会（北海道物産）、森村組（陶磁器など）、佐野理八組（生糸）、同伸会社（生糸）、貿易商会（生糸、製茶、蚕卵紙、鉱産、金属）、扶桑会社（生糸、製茶、陶器、外国製産品、器械）、イロハ商会（生糸）、田代組（上野屋、陶磁器類）である。

十二年、前田は大蔵省に移り「直接貿易意見一斑（直接貿易基礎確定ニ関スル三大要綱）」を大隈重信に提出した。二人は大隈積極財政下での直（じき）貿易政策の理論的支柱だった。

一、中央銀行の設立

（明治十四年、三井銀行の為替方を廃止して日本銀行が創設された。）

二、貿易会社の設立

直（じき）貿易を十三年から実行すること。（十三年に横浜正金銀行が営業を開始した。現みずほ銀行の源流の一行。）

三、産業カルテルの設立

すでに海外貿易に実績ある会社から当面七つの直貿易会社を設立し、政府の為替資本金をこの七社に限定運用すること。

当面七社に限る理由：

a. 乱立する貿易会社の共倒れを防ぐ
b. 外国商人の支配を防ぐ
c. 直貿の先導者とするため

諸般の事情から前田の提言は実現しなかった。幕末にヨーロッパを十一ヶ月間にわたって視察した友厚ももちろん「出輸」（でゆ、輸出）の必要性を早くから痛感していた。九年に東西に「朝陽館」を設立して製藍事業を始めたのも輸出が大きな目的であった。その他にも友厚は日本製品の輸出を心がけた。

前田は明治二十一年、経済官僚の一人として山梨県知事に任命されて赴任し、道路整備、河川改修、甲州葡萄の普及等を行った。次いで農商務省農務局長兼東京農林学校長、農商務次官となった。二十三年元老院議官、貴族院勅撰議員に任じられた。四十年、死の日に男爵を授けられた。生涯、地方産業の振興に尽くした。妻は大久保利通の姪だった。

「赤き心」

友厚没後十年目明治二十八年の正名の献歌を『新・五代友厚伝』の著者八木孝昌先生は感慨をもって自著に再録されている。（本紙巻頭にも毎号●「赤心」継がんを付してある。）

時くれば　赤き心もあらはれて
惜しまれて散る　紅葉なるらん

（参考書籍）
・祖田修『前田正名』吉川弘文館　一九七三年
・宮本又次『五代友厚伝』有斐閣　一九八〇年
・八木孝昌『新・五代友厚伝』PHP 研究所　二〇二〇年
・末岡照啓『五代友厚と北海道開拓使事件』ミネルヴァ書房　二〇二二年
・陳舜臣『阿片戦争』講談社文庫　一九六七年

五代の生涯の偉業「弘成館」鉱山業（五）

Dream 五代塾顧問　八木孝昌

五代の大久保宛半田銀山高覧依頼

明治九年（一八七六）六月二一日に明治天皇の半田銀山行幸がありましたが、その二週間前の六月七日に大久保利通が半田銀山に出向いて、半田鉱山長の吉田市十郎から聞き取りをしています。このことについて吉田が「大久保内務卿巡検記」という文書記録を残していて、その標題からは、行幸を前にした大久保内務卿の下検分が行われたように見えます。しかし、下検分以上の問題がそこでは検討されています。第13号の連載第四回で書いたことなのですが、銀山の工場が排出する「洗鉱濁水が種苗を害する」という地元農民の主張を受けて、工場が「毎年三月末より九月中旬に至るまで休業」している現状が聴取されます。農民側のその主張は、五代が半田銀山を入手する以前の銀山操業期間の経験から来ているに違いありません。

半田銀山採鉱事務所及其附近ノ図

この問題は、しかし、天皇行幸を間に挟んだ一カ月後の七月八日に、工場側と地元民側との間で「締約書」（公害防止協定）が交わされることによって急転直下解決します。「締約書」は「此坑水は其浮動含有物を沈定して全く清浄ならしむる上は、植物に何等の妨害をも及すことなし」とする政府機関「鉱山寮」による工場濁水分析結果を根拠として、「これまでの工場排水処理のための溜池三カ所に加えて、四カ所の溜池を新築して、泥砂沈殿処理を行う」等の対策を条文化しています。

締結書が交わされたあと、半田銀山はフル稼働に移行し、銀産出高が飛躍的に拡大しました。大久保内務卿の「巡検」は半田銀山発展にとって決定的な役割を果たしたことになりました。そうすると、大久保は半田銀山の窮状を現地「巡検」によって知ったのではなく、「巡検」前に知っていた可能性が浮上します。実はそれを証する五代友厚の大久保宛五月二六日付書状が残っています（『五代友厚伝記資料』第一巻）。書状の要点は次のようです。

半田鉱山長吉田市十郎を派遣するのでお目通りいただいて、福島県下の景況も聞き取りいただきたく、また半田へ出向いてご一泊いただきたい。田舎の情は不思議の処で、人心を治める儀もあって、吉田始め皆が望んでいることなので、ご都合をつけていただければ有難い。

この書状は『桑折町史』第九巻「半田銀山」に収録され、そこでは「半田銀山高覧依頼」という表題がついています。これで分かるように、大久保の半田銀山「巡検」は五代友厚の依頼によるものだったのです。

明治天皇の半田銀山行幸

明治天皇の半田銀山行幸は当初六月二〇日の予定でした。天皇の福島駅到着は一九日でしたが、翌二〇日が雨天となったために、行幸が一日延びて二一日になりました。

行幸の次第を半田銀山鉱長の吉田市十郎の記録（『五代友厚伝記資料』第三巻）に即して記します。天覧の順序は八段階に分かれていました。

一、「半田銀鉱詰所に御着輦（ちゃくれん。車の到着）」。小休止と「昼饌」（昼食）。

二、「出御」。「第三坑口」より入って「坑内所用吸水機・鉱石操挙機・鉄具・火薬導

火類・鉱石車・採掘鉱石・坑内支柱組立雛形・支柱矢板等、天覧」。
三、「洗鉱所」にて「洗鉱　天覧」。
四、「撰鉱所」にて「撰鉱　天覧」。
五、「詰所裏門」より「入御」。「搗鉱及鉱石搬運之都合天覧」。
六、「焼鉱及焼鉱石運搬之都合天覧」。
七、「混汞（こんこう）所」にて「焼鉱石、水銀鉄丸混汞樽振動、及樽おり水銀流出、鹿皮を以て『アマルガム』銀に絞り上げ之都合天覧」。
八、「分析所」にて「アマルガム銀、乾餾（乾溜）飛散、還元流出之順序及乾餾熔解、御紋模型に鋳型之都合　天覧」。

上記「七」の「混汞」とは、金鉱石あるいは銀鉱石を砕いて水銀を混ぜて搗くと、金あるいは銀は水銀に吸収され、アマルガムという合金になりますが、それを革袋に入れて圧搾して水銀を除き、さらにこれを過熱して水銀を蒸発させることによって金あるいは銀を得る工法のことです。

「八」にある「御紋模型に鋳型」とは、重量「二貫五百匁」（九・三七五キログラム）の金銀混合金属を鋳型に鋳込んで菊花御紋章を制作し天覧に供したことを指します。

「着輦」が午前一〇時三〇分、「発輦」が午後一時三〇分、三時間の天覧でした。

天皇の御褒詞

この天覧には福島県参事中條政恒、鉱長吉田市十郎が先導役を務めました。天覧が終り、事務所での休憩の折に、吉田鉱長が天皇の「御前」に召されました。そのとき、徳大寺實則宮内卿の侍坐のもとで、木戸孝允内閣顧問より次のような「御褒詞」がありました。

当鉱五代友厚開坑より現今の盛況にも立ち至り、国家の公益に致し、殊に近傍人民にも多少（多大）の幸福を与へ候事、御満足に思（おぼ）し召さる。且つ足下に於て五代の委託を受て尽力、今日の景況に至り候儀、神妙に思し召され候。

「御褒詞」中の「国家の公益に致し」とあるのは、銀山開坑が国の殖産興業政策に沿っていることを意味しているとともに、国家財政への寄与の意味合いも含んでいます。桑折町（こおりまち）文化記念館刊・佐藤次郎著『半田銀山の歴史』が行幸の趣旨を「明治政府は将来の財政を考慮し、この山の存在を重視し、天皇の行幸がなされたものと考えて間違いないだろう」と述べている通りです。また「近傍人民にも多少の幸福を与へ」とは、銀山が多数の雇用の場となったことに併せて、本紙12号・13号で見たように、工場排水公害対策についての地元民と工場側との「締約書」が近く結ばれようとしていることをも含意しています。

「締約書」締結は約半月先のことですが、この行幸はそこに至る道筋を視野に収めたものであったと言えそうです。（次号に続く）

明治天皇行幸記念碑

大阪に「五代が五体」商都大阪を築いた「大阪の大恩人」五代友厚

Dream 五代塾理事長　川口　建

五代友厚は明治維新直後の沈滞気味の大阪経済を復興させ、商都大阪の発展に貢献した。造幣寮（現大阪造幣局）などの創立に尽力、その後、民間の実業家に転身し、大阪財界をまとめ、製鉄・貿易・銀行・鉄道会社・学校の創立など、幅広い分野で活躍した。また、五代は後輩の面倒をよく見、気前よくお金を貸し与えた。五代の死後に残したのは100万円の負債だけだった。五代は死の直前に本籍を鹿児島から大阪に移している。心から大阪を愛したのでしょう。

このような五代の生き方が、大阪に「五代が五体」を実現させたのではないでしょうか。以下、設置年代順にご紹介します。

なお、鹿児島にも2体あるので紹介します。今回紹介を省きますが、番外編として、胸像が大阪企業家ミュージアム、肖像レリーフが造幣博物館に夫々一つあります。

■大阪商工会議所銅像

明治33年（1900）9月、大阪堂島の大阪商業会議所に銅像が建つ。

明治11年（1878）8月に現大阪商工会議所の前身である大阪商法会議所が設立。設立準備中は仮事務所を堂島の五代の朝陽館（藍製造会社）に置き、ここは創立の地となる。その後、高麗橋筋（御堂筋寄り）に移転した。明治23年（1890）3月に旧朝陽館跡地に新築移転（翌年の明治24年1月大阪商業会議所へ改組）した。そして明治33年に当地前庭に五代友厚像を建立した。しかし、昭和18年（1943）8月に戦中金属回収令により銅像を献納した。（台座のみ残す）

昭和28年（1953）11月、大阪商工会議所創立75周年を迎えるにあたり、10月8日、五代友厚像が元の場所に再建された。（翌年の昭和29年に大阪商工会議所へ改組）　制作は京都の河原金吾氏。

昭和43年3月、現在の大阪商工会議所が落成し、五代友厚像も堂島の旧大阪商工会議所ビルから移設された。

像は明治33年当時の姿とほぼ同じで、右足を半歩前に、右掌を上に一寸前に出して、示現流のいつでも抜刀できるポーズである。

■光世証券（株）銅像

平成13年（2001）4月、北浜の光世証券本店正面入り口に銅像が建つ。

椅子に座り、右手で前をまっすぐ指さし、視線ははるか遠くに向けられている。

創業者の巽悟郎氏（「北浜の風雲児」の異名をとり、大阪取引所前身の大阪証券取引所初代理事長）は、親交のあった彫刻家中村晋也氏に制作依

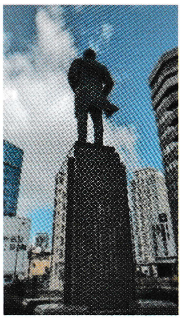
頼。五代が欧州に派遣された30歳ころの姿です。現社長の巽大介氏は「父は大阪経済のために奮闘した五代を自分に重ね合わせていたに違いない、五代像はこれからも社員の精神的支柱です」と語っておられる。

■大阪取引所銅像

平成16年（２００４）12月、大阪取引所に銅像が建つ。

像は、大阪取引所新ビル完成にあわせて設置された。制作は文化功労者で彫刻家の中村晋也氏で高さは7.8ｍ。

中村氏によると、「西の五代、東の渋沢」と並び評されるべきだということで、日本橋常盤橋公園の渋沢像となるだけ（台座も含め）高さを揃えた。また、五代のマントが跳ねているところは、いわゆる明治維新の風です。その風を受け活躍したということを表現している。



■大阪ビジネスフロンティア高等学校銅像

平成23年（２０１１）11月、市立天王寺商業高等学校１００周年を記念し銅像が建つ。

現在の校名は「２０１２年4月1日、天王寺商業・市岡商業・東商業3校の併合により、大阪ビジネスフロンティア高等学校となる。

五代友厚は大阪商業講習所を設立、その後進の大阪高等商業学校から独立開校したのが市立天王寺商業高等学校。銅像は校内にあるため非公開である。

■大阪市立大学銅像

平成28年（２０１６）3月、大阪市立大学（現大阪公立大学）に銅像が建つ。

五代友厚は大阪市立大学の前身である大阪商業講習所を設立。その五代生誕１８０年を記念して建てられた。銅像は富山県高岡市の銅像作家喜多敏勝氏の制作。

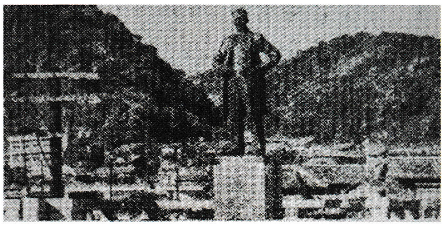
銅像のコンセプトは「右手に本を持ち、視線は遠く海外を見据え、市大学生に、進取の精神でグローバル感覚を身につける」というように優しく語りかけている。

出身地鹿児島市内にも2体の像

◆鹿児島泉公園銅像

昭和36年（１９６１）1月に鹿児島市の長田陸橋上に銅像が建つ。

当時の鹿児島市政だよりには大阪の伊藤証券専務坂岡勇治氏の寄贈。制作は彫刻家・坂上政克氏。「（略）・西郷、大久保と共に薩摩の三才といわれており、その誕生地を背後に、十号線国道長田陸橋の上から、鹿児島の経済発展を見守っています。」と記されている。



写真は陸橋上に設置されている。後ろの谷合の所が五代の誕生地。（昭和36年の鹿児島市政だより）

昭和56年（１９８１）3月、鹿児島県産業会館前の泉公園に移設された。

◆JR鹿児島中央駅東口前群像

昭和57年（１９８２）3月、JR西鹿児島駅前に「若き薩摩の群像」が建つ。

制作は彫刻家の中村晋也氏。

JR西鹿児島駅は殆どの列車の起終点として発着する運行上の拠点であり、古くから鹿児島市の中心駅としての役割を果たしていた。

平成16年（２００４）にJR九州新幹線が新八代駅と当駅間で部分開通に伴い「鹿児島中央駅」に駅名を改名した。

「若き薩摩の群像」は、幕末の薩摩藩遣英使節団19名（使節団・引率5名、留学生14名）が羽島～英国へ出発、そのメンバーの業績を記念し群像として建てられた。残念ながら当初の「若き薩摩の群像」は17名で、2名は薩摩藩外出身者との理由で除かれていた。

令和02年（２０２０）9月、「若き薩摩の像」に2名が追加され史実に即した19名全員が揃った。

大阪に5体、鹿児島に2体の五代友厚像、いかがでしたか。

皆さんも是非現地に行き、新しい発見をして頂けたらと思います。

Dream 五代塾活動予定

確定次第HPに掲載。会員にはメール発信もします。なお、①は10月スタート。

①座学セミナー・勉強会の開催

開催日は、偶数月の第三土曜日14時～16時

・教材：「開学の祖 五代友厚小伝」18話 著者八木孝昌（非売品）を基に進行。新しく学びたい方大歓迎。（後、懇親会）

・場所：川口宅又は貸し会議場

②五代友厚ゆかりの地探索

・大阪・堺・神戸各コースを適宜企画

③墓参・9月25日16時～大阪市設南霊園

神職による神事は無し。有志のみで参拝。

編集後記

大阪・関西万博は2025年4月13日から6ヶ月間開催される。私と同じ年代の多くの方は、1970年の大阪（吹田）万博の衝撃的な体験が忘れられない。その後の大阪・日本経済が世界に向けて大きく飛躍したきっかけにもなった。

皆さんはご存知ないかもしれませんが、五代友厚は日本が初参加した万国博覧会に大きく関わっていました。第1回の万国博覧会は1851年のロンドン、第2回は1867年のパリで開催され、日本が参加したのは第2回からです。五代は1865年に薩摩藩遣英使節団の欧州視察中に、モンブラン伯爵から、パリ万博への出店要請を受け、藩に進言し、いち早く出品を決定、現地詳細準備・手続きはモンブラン伯爵を代理人とし帰国しています。

今回、「大阪の大恩人」五代さんの功績の一つである「万国博覧会」が160年の時間を経て大阪（夢洲）で甦るということです。大阪・関西万博への協力と成功を祈り、大阪・関西の更なる飛躍へのエネルギーを五代さんから頂こうではありませんか。（川口建記）

（連絡先：川口建）　Email:gogoken12345@gmail.com　Tel：080-4497-5688
HP:https://www.dream-godai.com ➡➡➡➡➡➡➡➡